

## 新版『資本論』第1巻講座 第2講義

### 商品とはなにか

主催：千葉県学習協会

ところ：千葉県自治体福祉センター

日時：2022年7月17日(日) 午後1時～5時

講師：萩原伸次郎（横浜国立大学名誉教授）

## 第1部 資本の生産過程

### 第1篇 商品と貨幣

#### 第1章 商品

本日の講義は、最も難しいところです。なぜなら、マルクス自身が、そういつているからです。「すべてははじめはむずかしいということは、どの科学にも当てはまる。だから、第1章、ことに商品に分析を収める節〔本書の第1章に当たる〕の理解は、もっとも困難であろう」（新版①8頁、原文11頁）。

本日の講義は、大きく3つの部分に分かれます。第1→第1節、第2節、価値の実体は何かを究明する部分。価値実体論といいます。第2→第3節、商品はその価値をどのように表現するかを究明する部分。価値形態論といいます。第3→商品をめぐる人と人との関係が、なぜモノとモノとの関係として現れるのかを究明する部分。商品の物神性論といいます。

マルクスは言います。「経済的諸形態の分析にさいしては、顕微鏡も科学的試薬も役に立ちえない。抽象力が両者にとって代わらなければならない。ところが、ブルジョア社会にとっては、労働生産物の商品形態または商品の価値形態が、経済的な細胞形態である。素養のないもの者にとっては、この形態と分析はただいたずらに細かいせんさくをやっているように見える。この場合には実際細かいせんさくが肝要なのであるが、それはまさに、顕微解剖学でそのようなせんさくが肝要なのと同じことである。だから、価値形態にかんする部分を別とすれば、本書を難解だと言って非難することはできないであろう」（新版①9～10頁、原文12頁）

マルクスは、序言で、「私がここに第1巻を公刊するこの著作は、1859年に刊行された私の著書『経済学批判』の続きである」と述べる。しかし、1859年の『経済学批判』の序言にある、著述プランと第1巻公刊におけるプランが大きく違っていることは、明らか。なぜなら、『経済学批判』の序言では、次のように言っているからだ。「わたくしはブルジョア経済の体制を次の順序で考察する。すなわち、資本、土地所有、賃労働、国家、外国貿易、世界市場。はじめの三項目では、わたくしは近代ブルジョア社会がわかれている三大階級の経済的生活諸条件を研究する。あとの三項目の連関は一見してあきらかである」（『経済学批判』岩波文庫、11頁）。第1巻第1部生産過程と銘打った、現行『資本論』の序言では、次のように述べられた。「あの以前の著書の内容は、この巻の第1章〔本書の第1篇にあたる〕に要約されている。そうしたの、連関をつけ完全に

するためだけではない。叙述が改善されている。……価値理論および貨幣理論の歴史にかんする部分は、こんどは当然に全部なくなっている。」と述べ、その序言の最後に次のように書いているからだ。「この著書の第2巻は資本の流通過程（第2部）と総過程の諸姿容（第3部）とを取り扱い、最後の第3巻（第4部）は理論の歴史を取り扱うであろう」と述べているから。

## 第1節 商品の二つの要因—使用価値と価値（価値の実体、価値の大きさ）

「資本主義的生産様式が支配している諸社会の富は、「商品の巨大な集まり」として現われ、この商品はその富の要素形態として現われる。それゆえ、われわれの研究は、商品の分析から始まる」（新版65頁、新書版59ページ、原文49ページ）

『資本論』の論理は、分析し本質を取り出し（下向法）、それを総合し現象に戻る（上向法）：現象（現れ）→本質（実体）→現象（形態）となっていることを理解するのが肝要。マルクスの論理は、この本質を演繹的に分析し、その実体を究明し、その実体がどのように現象するかを明らかにしますが、その次にどうして、なぜ、そのように現れるのか？ということの説明をするのです。たとえば、自然科学だと、水は、水素（H）と酸素（O）から成り立っているというのが、実体論ですが、なぜ、水素と酸素からなる、水が、火にかければ、それを消し去る、流動物体となって現れるのか、を説明するといえ、お判りでしょうか？

①「ある物の有用性は、そのものを使用価値にする」（新版66頁、新書版60ページ、原文50ページ）

②「交換価値は、さしあたり、一つの種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係、すなわち比率として現われる」（新版68頁、新書版61-2ページ、原文50ページ）

そして交換価値に秘められる《共通なもの》はなにか、の謎解きを演繹的におこなう。まず使用価値を捨象し、労働生産物という商品の属性を導き出すが、この労働も使用価値を捨象することによって、具体的有用労働の性格も消えうせてしまう。すると、労働は、同じ人間的労働、すなわち抽象的人間的労働に還元されるのである。すると「それらに共通な、この社会的実体の結晶として、これらの物は、価値—商品価値である」（新版71頁、新書版65ページ、原文52ページ）

③さらに、この価値について考察を続けよう。その価値の大きさはどのようにしてはかれるのだろうか。→労働時間によってである。社会的平均労働である。「社会的に必要な労働時間とは、現存の社会的・標準的な生産諸条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度をもって、なんらかの使用価値を生産するのに必要な労働時間である」（新版

73 頁、新書版 66 ページ、原文 53 ページ)

A 商品の価値 : B 商品の価値 = A 商品の生産に必要な労働時間 : B 商品の生産に必要な労働時間

その労働時間は、労働の生産力の変動によって変動する。労働の生産力は、いろいろな事情によって規定される。①労働者の熟練の平均度②科学とその技術学的応用の可能性との発展段階③生産過程の社会的結合④生産手段の規模とその作用能力④自然的諸関係

④価値なしの使用価値はあるが、使用価値のない価値はない

## 第2節 商品に表される労働の二重性

①「商品に含まれる労働のこの二面的性質（二重性）は、私によってはじめて批判的に指摘されたものである」（新版 77 頁、新書版 71 ページ、原文 56 ページ）

使用価値に表される労働を簡単に有用的労働と呼ぶ。リンネルと上着は質的に違う使用価値であるのと同じように、労働も織布労働と裁縫労働という違いがある。社会的分業は商品生産の実存条件である。

②「商品の価値は、人間的労働自体を人間的労働一般の支出を、表わしている」（新版 82 頁、新書版 75 頁、原文 59 ページ）

「したがって、商品に含まれている労働は、使用価値との関連ではただ質的にのみ意義をもつとすれば、それが価値の大きさとの関連でただ量的にのみ意義をもつのは、それがもはやそれ以上の質を持たない人間的労働に還元されているからである」（新版 84 頁、新書版 77 ページ、原文 60 ページ）

③生産力は、有用的具体的労働の生産力であり、与えられた時間内における合目的的生産的活動の作用度だけを規定する。生産力がどんなに変動しても、同じ労働は同じ労働時間内には、常に同じ価値の大きさを生み出す。（新版 85 頁、新書版 78—9 ページ、原文 60—1 ページ）

ここまでの、商品の価値実体論である。

## 第3節 価値形態または交換価値

この第3節は、前節までにおいて、明らかにした、価値の実体、すなわち、労働が、どのように、価値として表現されるかについて、明らかにする。価値形態論である。

使用価値は、物理的に把握することができるが、価値はできない。なぜなら、「価値対象性は、純粋に社会的なものだから」である。「実際、われわれは、諸商品の交換価値または交換関係から出発して、そこに隠されている諸商品の価値の足跡をさぐりあてた。いまや、われわれは、価値のこの現象形態に立ち返らなければならない」（新版①88 頁、原文 62 頁）。

諸商品が、その価値の表現として、貨幣形態をもっていることは、誰でも知っているが、なぜ、なぜ貨幣が、発生したのかを、論理的に明らかにされたことは、いまだかつてなかったことだ。貨幣形態の発生を論理的に立証することによって、貨幣のなぞを解くのがこの節の目的である。

## A 簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態

20 エレのリンネル=1 着の上着 すなわち、20 エレのリンネルは1 着の上着に値する。

### 1 価値表現の両極—相対的価値形態と等価形態

「リンネルはその価値を上着で表現し、上着はこの価値表現の材料として役立っている」  
(新版 89 頁、新書版 83 ページ、原文 63 ページ)

「リンネルの価値は、ただ相対的に、すなわち他の商品でしか、表現されえない」なぜか、価値とは、商品と商品との社会的関係においてのみ現われ、商品の価値対象性には、一原子の自然素材も入り込まないからである。商品価値の内実は、抽象的人間労働にありとするのは、分析の結果わかったことであり、その本質がそのまま現われるわけではない。

「相対的価値形態と等価形態とは、同じ価値表現の、互いに依存し合い、互いに制約し合う、不可分の、契機であるが、同時に、互いに排除し合う、あるいは対立し合う、両極端、すなわち両極である」(新版 89 頁、新書版 83 ページ、原文 63 ページ)

### 2 相対的価値形態

#### a 相対的価値形態の内実

リンネル=上着、すなわち両者に共通するものが等式の基礎にある。それが価値なのだが、「われわれが、価値としては、諸商品は人間労働の単なる凝固体であるといえ、われわれの分析は諸商品を価値抽象に還元するけれども、商品にその自然形態とは異なる価値形態を与えはしない。一商品の他の商品にたいする価値関係のなかではそうではない。ここでは、その商品の価値性格が、他の商品にたいするその商品の関係によって、現われ出るのである」(新版 92~93 頁、新書版 86 ページ、原文 65 ページ) リンネルの価値は、上着の価値を通して、迂回して、回り道をして表現される。したがって、この関係では、「上着は、ここでは、価値がそれにおいて現われるものとして、または手でつかめるその自然形態で価値を表すものとして、通用する」(新版 94 頁、新書版 88 ページ、原文 66 ページ)「したがって、価値関係の媒介によって、商品 B の自然形態が商品 A の価値形態となる。言い換えれば、商品 B の身体が商品 A の価値の鏡となる。……商品 A の価値は、このように商品 B の使用価値で表現されて、相対的価値という形態をもつ」(新版 97 頁、新書版 90 ページ、原文 67 ページ)

リンネルがなぜ相対的価値という形態をもつというのか？ 相手があってはじめて価値を表現できるからといえる。関係する相手がなければ価値を表現することはできない。

## b 相対的価値形態の量的規定性

価値形態は、価値の大きさも表現しなければならない。

I リンネルの価値は変動するが、上着の価値は不変のままである場合  
商品 A の相対的価値は、商品 B の価値が不変のままでも、商品 A の価値に正比例して、  
上昇または低下する。

II リンネルの価値は不変のままであるが、上着の価値が変動する場合  
商品 A の価値が不変のままでも、商品 B の価値変動に反比例にして、低下または上昇す  
る。

III リンネルのおよび上着の生産に必要な労働分量が、同時に同じ方向に、同じ比率で  
変動する場合

商品 A の商品 B による価値表現はかわらない

IV ありとあらゆる組み合わせ I、II、IIIの応用

結論：価値の大きさの現実的変動は、価値の大きさの相対的表現に明確にも余すところ  
なしにも反映されるわけではないということ。価値の大きさとその相対的表現の不一致  
が、俗流経済学による労働価値説批判の根拠となった

## 3 等価形態

上着は、リンネルとの関係で等価物という形態を受け入れる。上着の価値の大きさは、  
それに必要とされる労働時間によって規定されているが、等価形態となるや価値の大き  
さとしては何の表現も受け取らない。なぜなら、上着という自然形態によって価値表現  
をするのだから。

等価形態の考察において、その第一の独自性：「使用価値がその反対物の、価値の、現象  
形態になるということである」（新版 103 頁、新書版 96 ページ、原文 70 ページ）

棒砂糖の重さが、その重量が予め規定されているさまざまな鉄片によって量られるのと  
同じこと、鉄片は、重さの現象形態、鉄片は棒砂糖にたいしてただ重さを代表するの  
である。しかし類似はここまでで、上着は、両方の超自然的属性、すなわち純粋に社会的  
なものであるそれらの価値を表わす。この等価形態は、価値関係から生じるにもかかわ  
らず、生まれながらにしてその属性を持っているかのような錯覚が生じる。ここに等価  
形態の謎的性格が生じるのだが、それは貨幣の謎でもある。自らその関係を作り出して  
おきながら、いったん生じるとその関係に支配されてしまうということ。

第二の独自性：「具体的労働がその反対物の、抽象的人間労働の現象形態になるという  
こと」（新書版 100 ページ、原文 73 ページ）

第三の独自性：「私的労働がその反対物の形態、直接に社会的な形態にある労働になる  
ということ」（新版 107 頁、新書版 101 ページ、原文 73 ページ）

アリストテレスの意義と限界：簡単な価値形態は商品の貨幣形態と同じことを見破って  
いたが、奴隷労働を基礎として生きた彼は、価値形態に潜む人間的労働一般を価値とし  
て見抜くことができなかった。

## 4 簡単な価値形態の全体

「商品の価値形態または価値表現が商品価値の本姓から生じるのであり、逆に、価値および価値の大きさが交換価値としてそれらの表現様式から生じるのではない」しかし、重商主義者や自由貿易行商人にとっては、「商品の価値も価値の大きさも交換関係による表現のうち以外には、実存せず、したがって、ただ日々の物価表のうちのみ実存する」（新版 111 頁改訳、新書版 104 ページ、原文 75 頁）

## B 全体的な、または展開された価値形態

$$20\text{エレのリンネル} \left\{ \begin{array}{l} = 1\text{着の上着} \\ = 10\text{ポンドの茶} \\ = 40\text{ポンドのコーヒー} \end{array} \right.$$

### 1 展開された相対的価値形態

「あるひとつの商品、たとえばリンネルの価値は、いまや商品世界の無数の他の要素で表現されている。他の商品体はどれもリンネルの価値の鏡となる」（新版 114 頁、新書版 107 ページ、原文 77 ページ）→二人の個別的商品所有者の偶然的関係ではなく、多くの商品所有者の商品によって価値が表現される

### 2 特殊等価形態

相対的価値形態の位置にある商品を除いた全ての商品が、等価形態の位置を占めうる

### 3 全体的な、または展開された価値形態の欠陥

①未完成②雑多な寄木細工③どの商品の相対的価値形態も他のどの商品の相対的価値形態とも異なる価値表現の無限の一系列  
逆にひっくり返せば、

## C 一般的価値形態

$$\left. \begin{array}{l} 1\text{着の上着} = \\ 10\text{ポンドの茶} = \\ 40\text{ポンドのコーヒー} = \end{array} \right\} 20\text{エレのリンネル}$$

### 1 価値形態の変化した性格

#### (1) 簡単

#### (2) 統一的

「商品世界の諸価値を、商品世界から分離された一つの同じ商品種類、たとえばリンネルで表現し、こうして全ての商品の価値を、それらの商品のリンネルとの同等性によって表わす」（新版 120 頁、新書版 113 ページ、原文 80 ページ）商品世界の共同事業 全ての商品が量的に比較しうる価値の大きさとして出現 リンネルが社会

に選ばれた等価形態となる 織布労働が人間的労働一般の一般的現象形態となる

## 2 相対的価値形態と等価形態との発展関係

「あるひとつの特殊的な商品種類が一般的等価形態を受け取るが、それは、他の全ての商品がその諸品種類を、それらの商品の統一的一般的価値形態の材料にするからである」  
(新版 123 頁、新書版 115-6 頁、原文 82 ページ)

## 3 一般的価値形態から貨幣形態への移行

「その自然形態に等価形態が社会的に癒着する独自の商品種類は、貨幣商品となる」(新版 125 頁、新書版 118 ページ、原文 83 ページ)  
この特権的地位を歴史的に勝ち取ったのは、金 である

## D 貨幣形態

20エレのリンネル =	} 2オンスの金
1着の上着 =	
10ポンドの茶 =	
40ポンドのコーヒー =	

## 第4節 商品の物神的性格とその秘密

われわれは、商品を、抽象力を駆使して分析した結果、その価値を労働時間に帰着させた。しかし、価値の大きさは、商品経済では、労働時間を使って表現されることはない。商品で商品の価値を表現するという、モノとモノとの関係を通してしか表現することはできないのだ。だから、商品をめぐると人の関係が、隠蔽されてしまう。そうした事態が引き起こされるのはどうしてなのか？ これを明らかにすることが、この節の目的だ。

「テーブルが**商品**として登場するやいなや、それは感性的でありながら超感性的な物に転化する。」 マルクスは、「労働生産物が商品形態をとるやいなや生じる労働生産物の謎的性格」といっているが、これをわかりやすくいえば、労働生産物が商品の形態をとることによって、ことの本质を覆い隠してしまうことから生じるさまざまな事態をさしているということができよう。たとえば、毎日、価格が変動する商品から物事を考えると、商品価値が労働時間によって決定されるなどということを理解することはできないし、金貨幣は、その自然的属性によって価値があると思ってしまう。企業利潤も資本設備という物から生じるという考えが出てきてもおかしくないし、地代は土地から生まれ

るのである。商品社会において、人間の関係が物の関係を通して現われるから、そうなるのだが、科学はそこから分析し、本質を取り出さねばならない。しかし、本質がわかったとしても常に現実には、物と物の関係として現われるから、商品の神秘性は、たとえ科学的立場に立って物事を考えても常に消えることはない。この箇所は、『資本論』理解にとって決定的に重要。理解できない場合は、他の経済学と異なる『資本論』の面白さが理解できないということになってしまうので、詳しく解説したい。

「労働生産物の謎的性格は、どこから生じるのか？この形態そのものから生じる」とマルクスは言う。つまり、商品社会では、抽象的人間労働の量を等価形態にある商品の物的量によって測らなければならない、最終的には貨幣によって測るところから労働生産物の謎的性格が発生する。

こうした商品社会の特質の類例を求めると、宗教的世界の夢幻境に逃げ込まなければならないと、マルクスは言う。「ここでは、人間の頭脳の産物が、それ自身の生命を与えられて、相互のあいだでも人間とのあいだでも関係を結ぶ自立的姿態のように見える」（新版 131 頁、新書版 124 ページ、原文 86-7 ページ）「物神崇拜」商品交換という物と物との関係によって私的労働が社会的労働の一翼を担うということが、商品社会では起こる、これが「物神崇拜」が生じる根本的要因。商品社会では、私的労働が社会的労働の一翼を担う事実が、商品交換というモノとモノとの関係として現われざるを得ないからである。

「労働時間による価値の大きさの規定は、相対的な諸商品価値の現象的運動の下に隠されている秘密である。この秘密の発見は、労働生産物の価値の大きさが単に偶然的に規定されるだけであるという外観を取り除くが、この規定の物的形態を取り除きはしない」（新版 135 頁、新書版 128 ページ、原文 89 ページ）

この神秘化は、別の生産様式では消えうせる。

- ① ロビンソン物語
- ② 暗いヨーロッパの中世
- ③ 農民家族の素朴な家父長的な勤労
- ④ 自由な人々の連合体

マルクスは、ブルジョア的生産様式を永遠不変の様式とは考えない。なぜなら、彼の考えの根底には、史的唯物論があるからだ。この箇所でも、マルクスは、ブルジョア生産様式を乗り越えた、商品関係による神秘化された社会、すなわち「物神崇拜社会」から自由な人々の連合体としての「未来社会」を次のように論じている。

「労働時間の社会的計画的配分は、さまざまな欲求にたいするさまざまな労働機能の正しい割合を規制する。他面では、労働時間は、同時に、共同労働にたいする生産者たちの個人的関与の尺度として役立つ、それゆえにまた、共同生産物のうち個人的に消費されうる部分にたいする生産者たちの個人的分け前の尺度として役立つ。人々が彼らの

労働および労働生産物にたいしてもつ社会的諸関連は、ここでは、生産においても分配においても、簡単明瞭である」(新版 141 頁、新書版 133~134 頁、原文 93 頁)。

「社会的生活過程の、すなわち物質的生産過程の姿態は、それが、自由に社会化された人間の産物として彼らの意識的計画的管理のもとにおかれるとき、はじめてその神秘のヴェールを脱ぎ捨てる」とマルクスは言うが、同時にそうした社会の到来もそう簡単ではないことを付け加える。「けれども、そのためには、社会の物質的基礎が、あるいは、それ自身がまた長い苦難に満ちた発展史の自然発生的産物である一連の物質的実存条件が、必要とされる」(新版 142 頁改訳、新書版 135 頁、原文 94 頁)。

経済学は、価値実体を論じたが、価値形態を論じなかった、なぜか？ それは、そうになると、ブルジョアの生産様式の歴史性に言及せざるを得なくなるからである。マルクスは言っている。

「古典派経済学の根本的欠陥の一つは、それが商品の分析、ことに商品価値の分析から、価値をまさに交換価値にする価値の形態をみつけだすことに成功しなかったことである。A.スミスやリカードのようなその最良の代表者においてさえ、古典派経済学は、価値形態を、まったくどうでもよいものとして、あるいは商品そのものの本性にとって外的なものとして、取り扱っている。その原因は、価値の大きさの分析にすっかり注意を奪われていたというだけではない。それはもっと深いところにある。労働生産物の価値形態は、ブルジョアの生産様式のもっとも抽象的な、しかしまたもっとも一般的な形態であり、ブルジョア的生産様式はこの形態によって一つの特種な種類の社会的生産として、それゆえまた同時に歴史的なものとして、性格づけられている。だから、人がこの生産様式を社会的生産の永遠の自然的形態と見誤るならば、人は必然的に、価値形態の独自性を、それゆえ商品形態の、すすんでは貨幣形態、資本形態等々の独自性を見落とすことになるのである」(新版 145 頁、新書版 137~138 頁、原文 96 頁)。